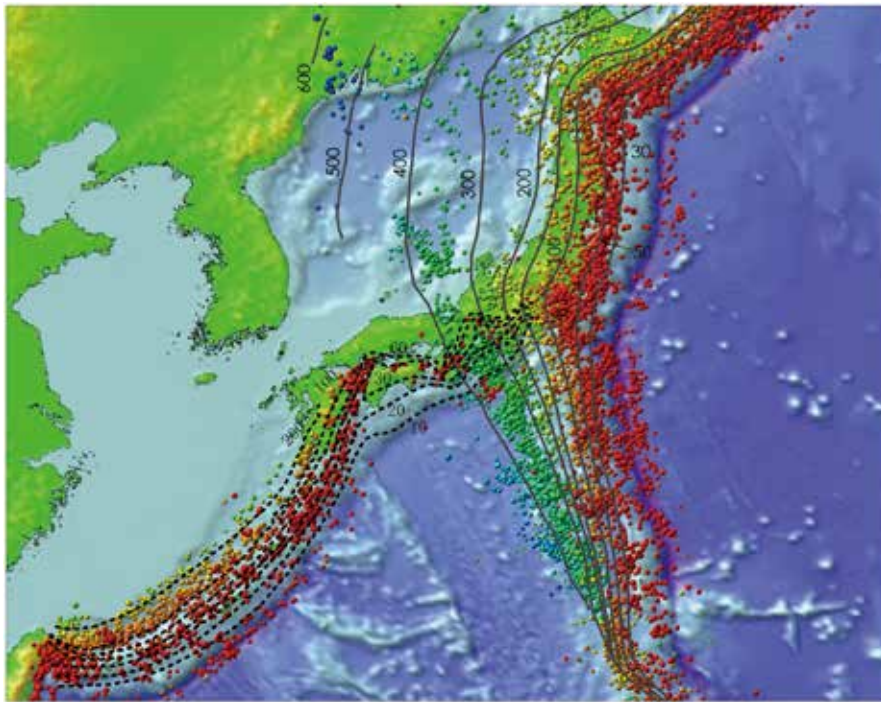
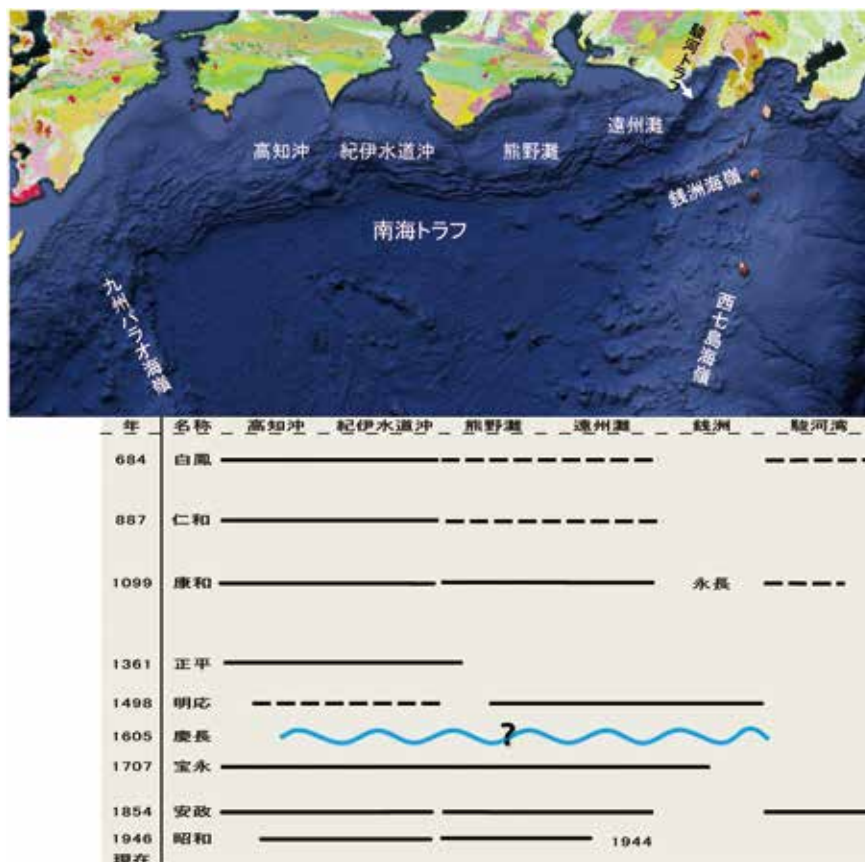




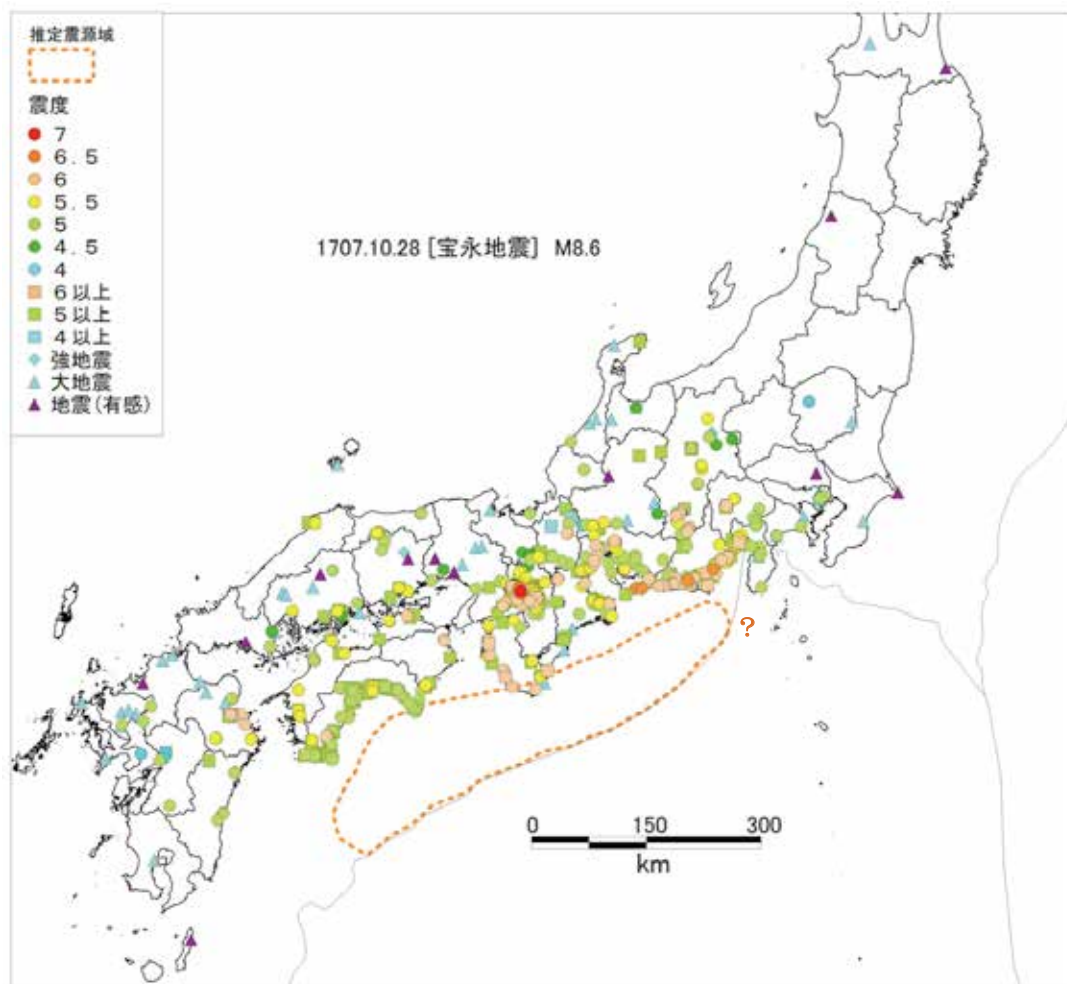
口絵1 日本付近のプレートの深さ分布

沈み込むプレートの深さを知る手がかりである深い地震の震源と、プレート上面の深さの等深線。点線はフィリピン海プレート、灰色実線は太平洋プレートを示す。数字は等深線の深さ (km)。球で示した使用震源は 2001 年～ 2010 年に発生した深さ 40km 以深 M2.0 以上の地震で ISC による。赤 40km から青 600km と深さで色が暖色から寒色へ連続的に変えてある。太平洋プレートが沈み込む領域に比べてフィリピン海プレートの沈み込む領域は幅が狭く、九州北部や中国地方には殆ど及んでいないことが見える



口絵2 南海トラフの地形・地質と巨大地震の履歴

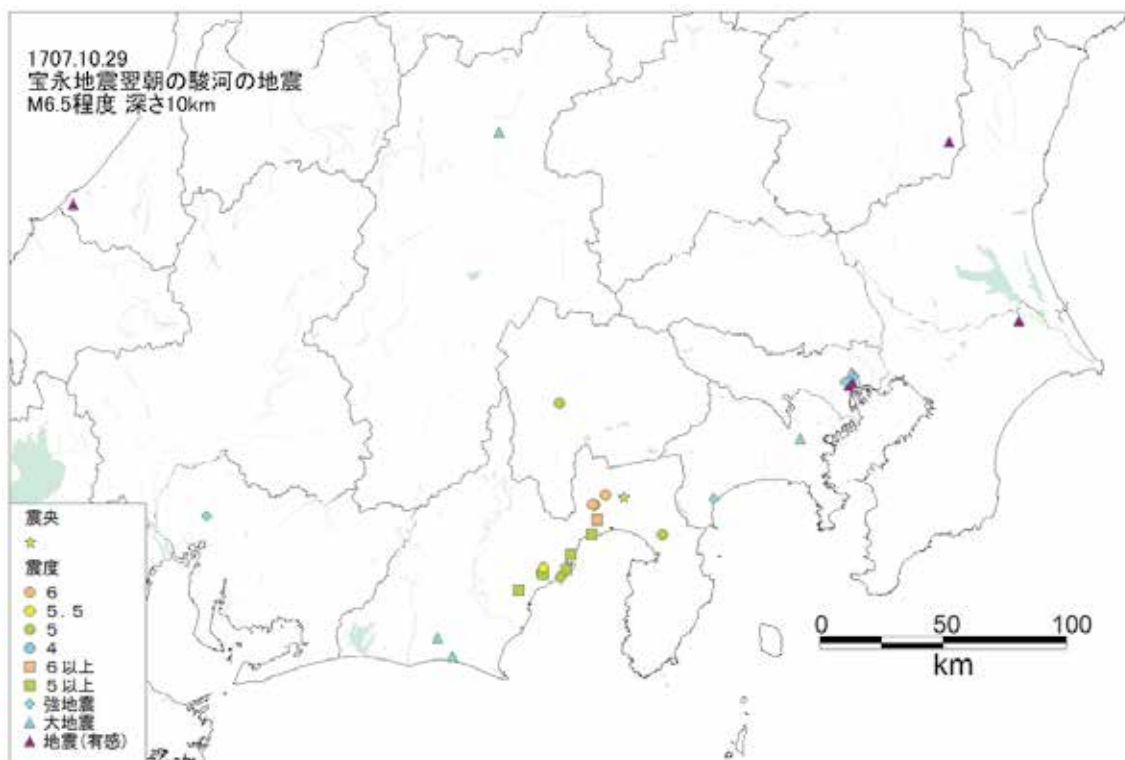
震源域の広がりがある確実な範囲は実線で、推定されている範囲は破線で示した（地質図は産業総合研究所の地質図 Navi、海底地形はグーグルマップを利用）。慶長は津波地震と言われ他と違って振動被害が全くなかったので波線で示したが、南海トラフの地震ではない可能性が高い。宮崎県から四国や紀伊半島の南半分に地質構造が縞状に繋がる様に分布しているが、これは「外帯」と呼ばれ、かつてフィリピン海プレートに付加されて謂わば日本列島が増えた部分である。



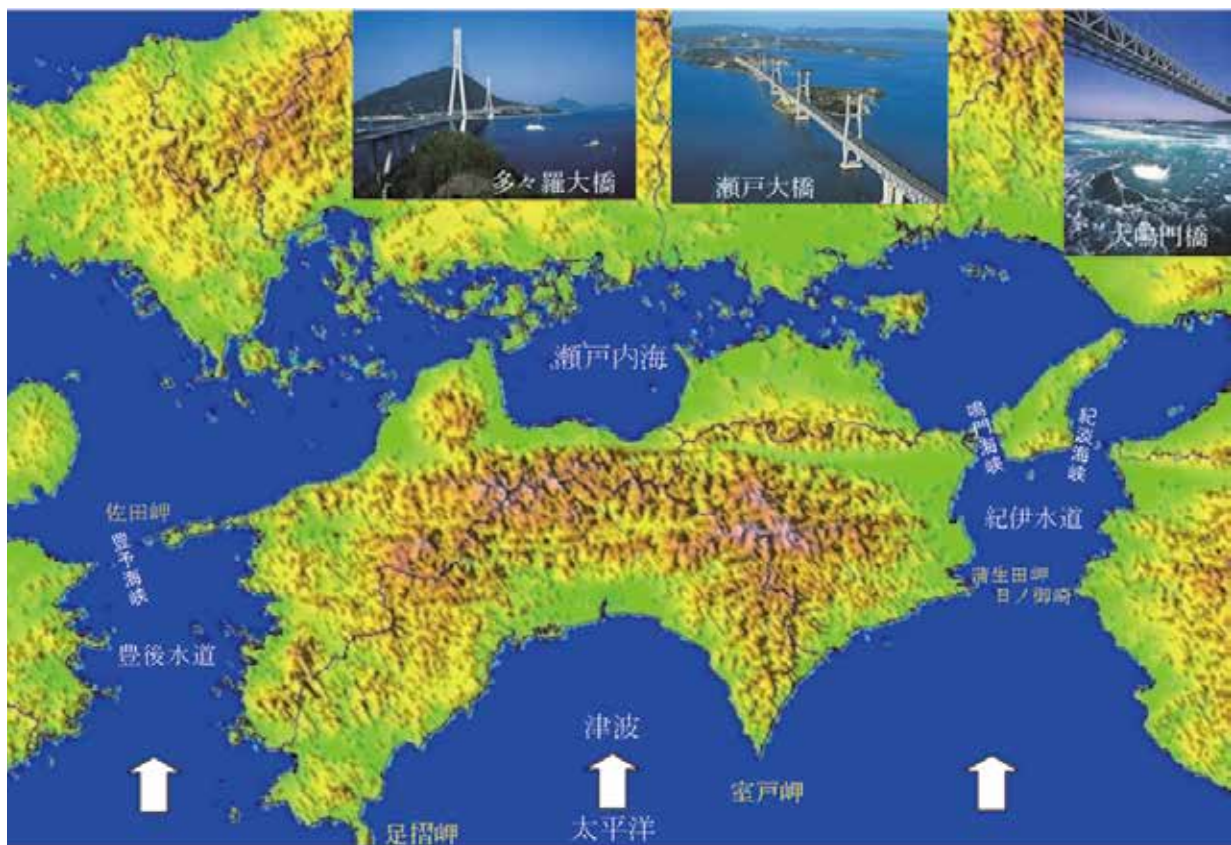
口絵3 1707年宝永地震の震度分布（松浦ほか，2011より）

震源域は御前崎からさらに離れて、「？」のある銭洲部分に及んでいた可能性もある。

灰色の実線は海溝軸（プレートの沈み込み口）を示す。図中にある海溝は、東から日本海溝・伊豆小笠原海溝、相模トラフ、駿河トラフ・南海トラフ、南西諸島海溝。

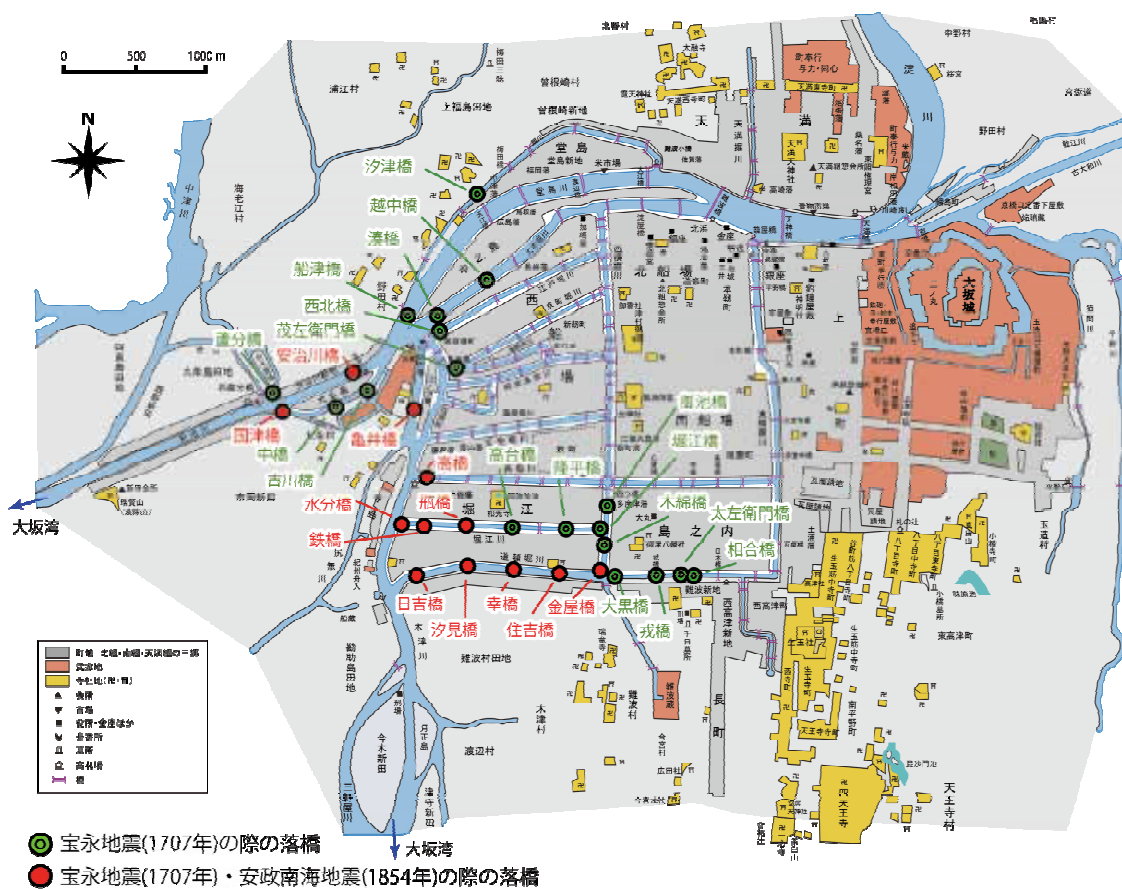


口絵4 宝永地震の翌朝に富士山東麓付近で発生した余震の震度分布
（中村・松浦，2012より）



口絵5 現在の四国の姿

(出典：愛媛大学防災情報研究センター、南海トラフ巨大地震に備える)



口絵6 宝永地震(1707年)と安政南海地震(1854年)における大坂市中での落橋の分布

注) 安治川・木津川の河口から浸入した津波に押し上げられ、堀川を遡行した大船群の衝突による橋の被害状況。

※塚田孝『歴史のなかの大坂 都市に生きた人々たち』(岩波書店、2002年) 76～77頁の地図に橋名を追加。



口絵7 津波警告板（和歌山県指定有形民俗文化財） 日神社蔵



正面



左側面



背面



右側面

口絵8 高波溺死靈魂之墓碑



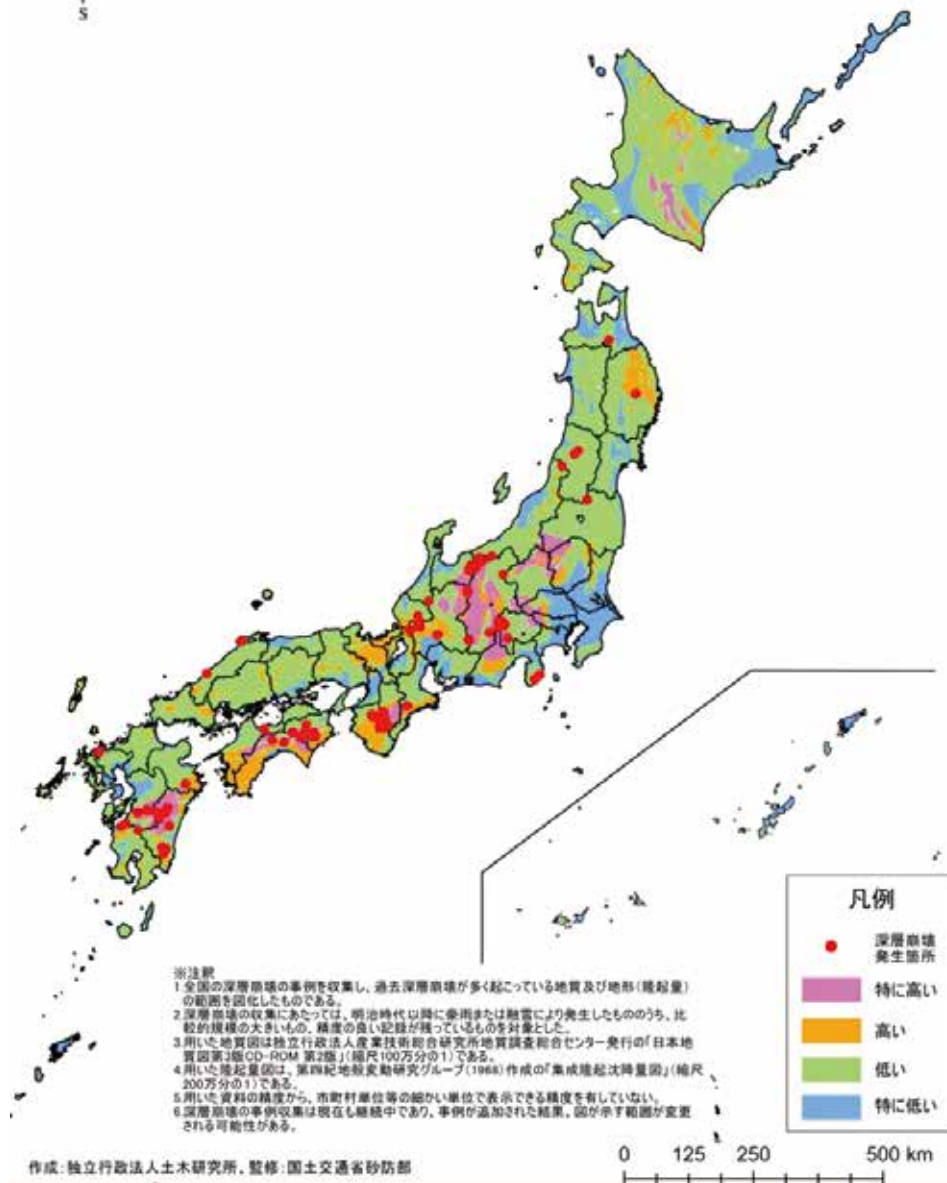
口絵9 米水津のようす

宝永4年(1707)の地震で、佐伯市米水津の浦代浦では養福寺にあがる石段2段をのこす高さ(およそ高11.5m)まで、津波がおしよせた。

— およそ海拔10m

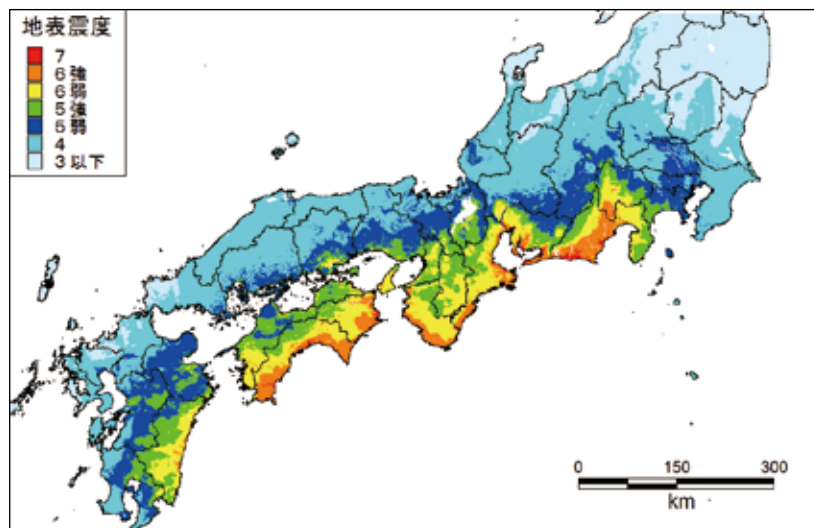


深層崩壊推定頻度マップ



口絵10 深層崩壊危険度マップ

(独立行政法人土木研究所作成 国土交通省 2010)

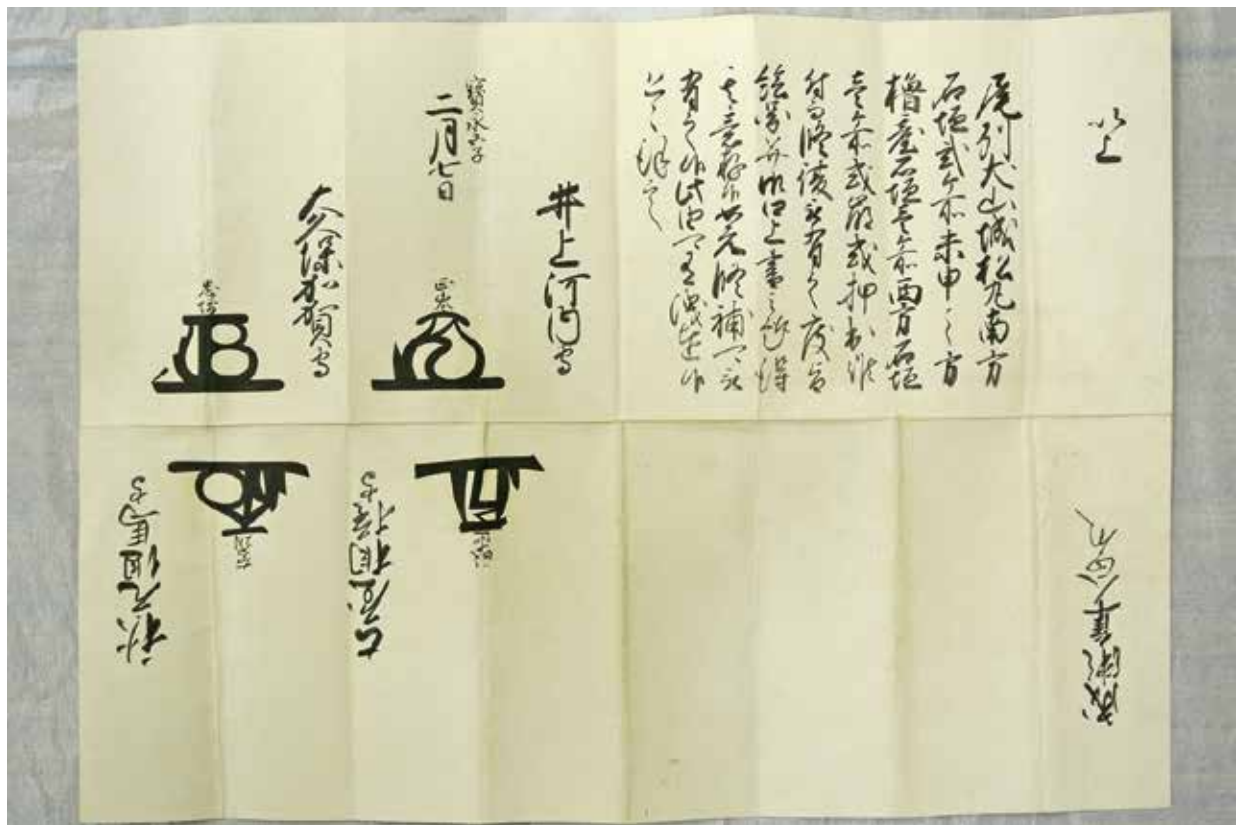


口絵11 ケース①基本ケースにおける想定震度分布

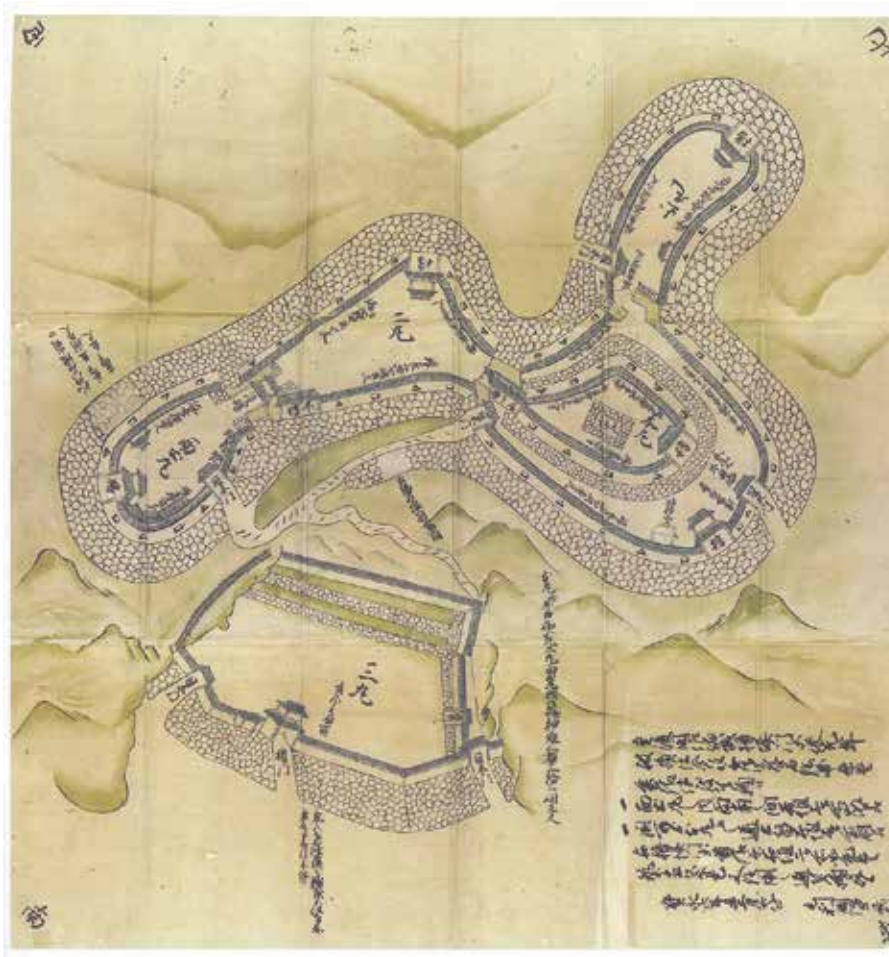
(H25 中央防災会議 南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ 最終報告書)



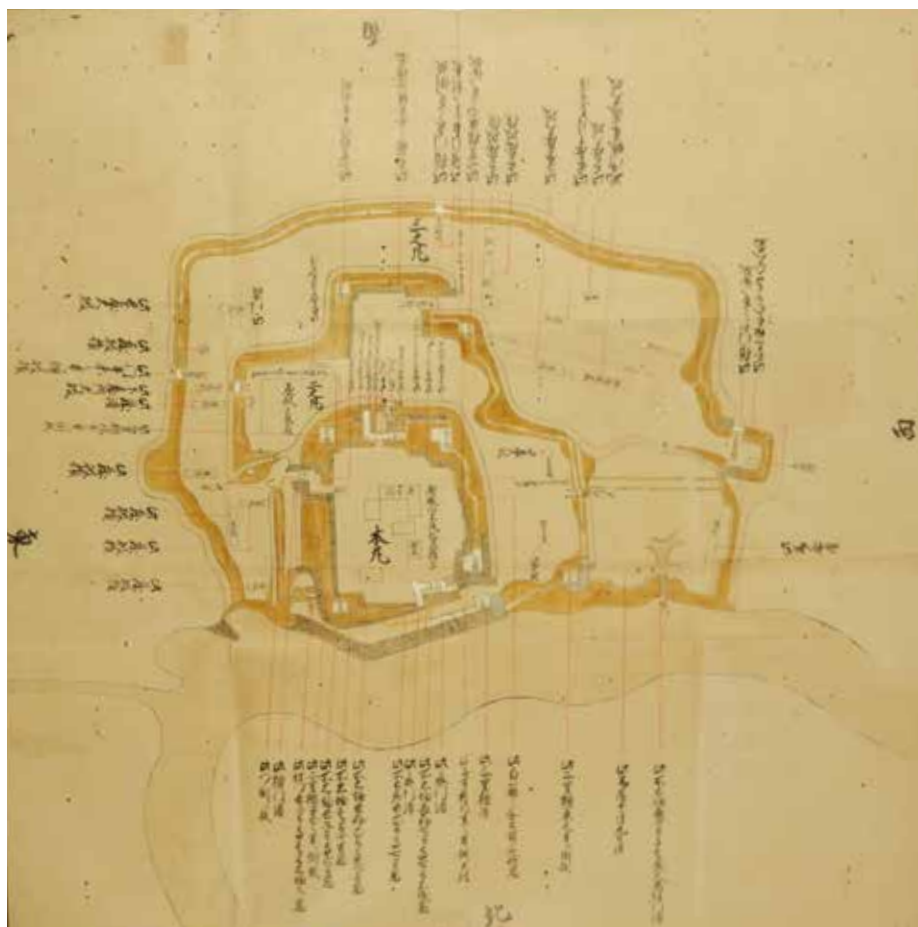
口絵 12 (犬山城修補願控図)
犬山城白帝文庫蔵



口絵 13 (犬山城修補許可老中奉書)
犬山城白帝文庫蔵



口絵 14 (佐伯城修復願図)
個人蔵



口絵 15 「御城御破損所御伺絵図」控
笠間稲荷美術館蔵